留学生名簿にみられる清末中国人の日本蚕糸業への留学実態

王　怡　然

はじめに

中国と日本の近代は、ともに農業社会から出発して、長い時期に亘って生糸が最大の輸出品であった。そのため、両国は熾烈な競合を余儀なくされた。明治政府は、中国蚕糸業の視察調査[(1)]、蚕糸業に関する書籍の翻訳[(2)]、日本各地への養蚕学校の設置、西洋の近代的な機械の輸入など一連の富国強兵・殖産興業などの政策を実行した。その結果、1906 年頃[(3)]から中国に代わり、世界生糸輸出市場でリーダーシップを発揮するようになり、日本の蚕糸業は、軍事学や教育学等と共に、多くの中国人留学生が勉強する科目となった。

このように、蚕糸業は日中両国にとり極めて重要な地位を占める産業であり、その交渉史の研究には充分な価値が認められよう。小論は、中国人の蚕糸業留学の最初期――清末期に絞り、その中国人留学生の名簿を整理しようとするものである。

本論では、主に次の史料に基づき、清末の蚕糸業留日学生名簿を作成した。

1.『清国留学生会会館第一～第五次報告』、清国留学生会館、1902 年 1 月～ 1904 年 11 月。

2.『清末各省官自費留日学生姓名表』、沈雲龍主編『近代中国史料叢刊続編第五十輯』（文海出版社、1978 年）所収。

3.『日本留学中華民国人名調』（上中下）、槻木瑞生編集・解題『日本留学中国人名簿関係資料』第 1―3 巻（龍溪書舎、2014 年）所収。

4.『学部官報』、台湾国立故宮博物院、1980 年復刻。

5. 遊学監督処『官報』、国家図書館出版社、2009 年復刻。

6.『中国蚕糸業会報』、中国蚕糸業会、1909 年 8 月～ 1911 年 1 月東京刊行。

7.『明治 40、43、45 年度私立甲種高山社蚕業学校並分教場附本科及別科生徒姓名』、群馬県立文書館蔵『藤岡市高山家文書』。

8.『農桑学雑誌』、農桑学雑誌社、1907 年 6 月～ 7 月東京刊行。

9. 津久井弘光「清末留日学生と信濃蚕桑学校」、『清代史論叢』（汲古書院、1994）所収。

清末蚕糸業留日学生の人数の原籍地と留学校別の分布及び留学時期ごとの留学生数の推移に関

しては、拙稿「清末蚕糸業留日学生人数小考」（『日語学習与研究』2019 年掲載予定）ですでに論じたが、ここでは簡単に紹介する。

上記の資料に基づき、筆者は表 1 清末留日蚕糸業学生の省別・学校別一覧表を作成した。

表 1　清末留日蚕糸業学生省別・学校別一覧表

学校／原籍地	（群馬県）東亜蚕業学校	東京蚕業講習所	（長野県）信濃蚕業学校 (4)	（東京）東亜蚕業伝習所	（群馬）私立甲種高山社蚕業学校	京都蚕業講習所	合計
四川	24	3	30	18	1		76 (5)
湖北	3	5	6	3	17		34
広東	2	12		1		2	17
広西	7			9			16
不明	8	2	5				15
浙江	1	6				5	12
湖南	8	2					10
江蘇	2	3				3	8
陝西	1			4			5
福建		5					5
雲南		1			1 (6)	1	3
山東						2	2
江西	1			1			2
貴州		1		1			2
河南		1					1
安徽		1					1
山西				1			1
合計	57	42	41	38	19 (7)	13	210 (8)

以下、表 1 に基づき、若干コメントする。

1. 人数。清末蚕糸業留日学生は合計 210 名に上ることが明らかになった。そのうち 50 名は従来注目されていなかった史料から筆者が新たに名簿に補充した留学生であるが、そのうち 38 名は上記史料 6 番に、残り 12 名は史料 7、8、9 番に基づいている。また、その 38 名はすべて東亜蚕業伝習所の留学生である。無論、これは概数にすぎず、実際はこれを上回ったであろうと推測されるが、少なくともこの 210 名は、姓名、原籍地、年齢、来日・卒業年月といった具体的情報を史料によって確認できる確実な人物である。清末の農業留日学生は合計 272 名という統計数字が公表されている (9)。この統計にも遺漏があると思われるが、それを目安とすれば、蚕糸業留日学生数はそのうちの 77.6％をも占めていたことがわかる。

2. 原籍地。中国東北三省及び新疆・チベットなど辺境地域を除き、16 省に亘る。そのうち、四川省（76 名）が最多で、半数以上を占める。湖北省（34 名）が第二位で、両者を合わせれば、

全体の半分になる。四川省の学生は（群馬県）東亜蚕業学校（24 名）、（長野県）信濃蚕業学校（30 名）、及び（東京）東亜蚕業伝習所（18 名）に集中している。

3. 留学校。私立と官立に分けると、前者が 155 名に上り、後者の 55 名を遥かに上回っている。私立のうち、（群馬県）東亜蚕業学校、信濃蚕業学校及び（東京）東亜蚕業伝習所は存続期間が短かったが、いずれも清国留学生のために開設された専門学校であった。高山社は日本人のための学校であるが、清末留学生も別科に入学することができた。以上私立四校で育成された 155 名は、いずれも速成蚕糸業留学生であった。官立の東京蚕業講習所（42 名）は、同じく官立の京都蚕業講習所（13 名）とともに、高水準の人材を育成した。両校の卒業生は、帰国留学生の登竜門であった「遊学畢業生考試」に好成績で合格した者も少なくなかった。例えば、陳耀西、邱中馨、潘志憘、張青選など農科挙人に及第した [10]。

4. 留学時期の推移

蚕糸業留学生の来日の入学・卒業年を表 2 にまとめた。

表 2　清末留日蚕糸業学生来日・入学・卒業時期一覧表

学校	東亜蚕業学校		東京蚕業講習所			信濃蚕業学校		東亜蚕業伝習所		高山社			京都蚕業講習所			合計		
時期	来日	入学	来日	入学	卒業	来日	入学	入学	卒業	来日	入学	卒業	来日	入学	卒業	来日	入学	卒業
1897			1													1		
1898			3													3		
1899			1													1		
1900			1		1											1		1
1901			3										1			4		
1902			6		3								1			7		3
1903			2	1									2			4	1	
1904	2		6		1	1							3			12		1
1905	2	2	5			5							1			13	2	
1906	13	9	4	4	3	14	8							2	2	28	23	5
1907	15	18	2	8	1	6	26	38						2		23	92	1
1908	1	2	1	6	1	1	2			16	16					19	26	1
1909				3	5				38								3	43
1910					5										3			8
1911					3													3
1912					2							18						20
不明	27	26	7	20	17	14	5			3	3	1	5	9	8	56	63	26
合計	57		42			41		38 [11]		19			13			210		112

蚕糸業留学は1897年から始まった。その嚆矢は浙江省出身の嵇侃であり、彼は杭州蚕学館より派遣され、最初は埼玉県競進社に入り、その後、東京蚕業講習所の養蚕実科に学んだ(12)。蚕糸業留学生は1904年から増加し、1906年から1908年までがそのピークであった。その理由は1903年から、清国政府が一連の私費留学を勧める政策を実施し、留学生が急増したからである。その数は1904年の2,400名からわずか一年で1905年には8,000名に上り、1906年にはピークの12,000ないし13,000名となった。1907年以降は勢いはやや減少したが、それでも10,000名の留学生が来日した(13)。蚕糸業留学生数の推移は清末の全留学生数の推移とパラレルな関係にある。

5. 留学費用の出所

清末の中国人留学生は、主に、官費生・公費生・自費生の三種類に大別される。

官費生は中央政府より派遣された留学生、公費生は県･州など地方政府より派遣された留学生、自費生は私費留学生を指す(14)。清末蚕糸業留学生に関しては、次の表3にまとめた。

表3 清末蚕糸業留日学生官・公・自費別一覧表

留学校 / 費用別	東亜蚕業学校	東京蚕業講習所	信濃蚕業学校	東亜蚕業伝習所	高山社	京都蚕業講習所	合計
官	1	16				5	22
公			1				1
自	29	14	26		16	3	88
不明	27	12	14	38	3	5	99
合計	57	42	41	38	19	13	210

備考 1. 官費生を官、公費生を公、自費生を自に略す。以下の表も同じ。
2. 実際には、留学中に私費より官費に転じることも可能であり、当表は筆者が調査した史料が作成された時点での分類である。

表から明らかなように､清末蚕糸業留日学生のうち､経費支給の記載のない学生99名を除くと、自費生（88名）が最多で、官費生と公費生を合わせた人数（23名）の約4倍、留日学生全体の41.9%を占めている。学校種別で見ると、官立二校（東京蚕業講習所及び京都蚕業講習所）は官費生が自費生より多いが、顕著な差はない。一方、私立三校（東亜蚕業学校、信濃蚕業学校、高山社蚕業学校）には、自費生が集中している(15)。官立学校に合格するには一定の学力が要求されたのに対し、上述の私立三校は蚕糸業従事者の速成を目的としたため、学力は要求されなかった。これは学校の種別と留学生の種別とが一致しているということであり､別に不思議ではない。但し、官費生と公費生が私立専門学校に入学したケースも稀には見られる。例えば、東亜蚕業学校と信濃蚕業学校に、それぞれ官費生1名、公費生1名が入学している。

6. 官・私立学校への留学期間

(1) 官立学校

上述したように、留学生は東京蚕業講習所と京都蚕業講習所に集中している。

東京蚕業講習所は、1884 年に蚕病試験場として発足し、1896 年に蚕業講習所と、1899 年に東京蚕業講習所と改名された。これは農商務省が創立した日本初の官立蚕糸業学校である[16]。表 1 ～ 3 に示したように、42 名の学生がここに留学したが、各学生の原籍地・留学時期等を学科別に整理すると表 4 のようになる。

表 4　東京蚕業講習所学生名簿

学科	原籍地	姓名	費用別	来日年月	入学年月	卒業年度	当講習所入学以前の学歴
養蚕本科	福建	陳耀西	官	1904. 三		1906	
		邱中馨	官	1904. 三		1906	
		林溥瑩		1906. 十	1908. 八	1911	経緯学堂卒業
		劉崇繩					
		葉君萱					
	広東	鄧応祥[17]	官	1900. 十	1907. 十一	1910	工手学校電工科卒業
		陳季超	官	1901. 二	1906. 八	1909	
		馮錦龍	官	1901. 三	1906. 十	1909	
		羅応煊	官	1902. 一	1906. 十	1909	
	浙江	倪紹雯	官	1905. 八	1907. 八	1910	宏文、正則学校普通科未卒
		劉宗鎬[18]	自	1906. 九	1909.9	1912	成城学校
	湖北	鄧振瀛	自	1904. 二		1906	
	江蘇	潘志憘				1908	
養蚕別科	広東	鄭華星[19]		1898. 二		1902	
		鄭瑞		1898. 二		1902	
		林国光		1903. 四		1904	
	江蘇	嵇侃	官	1897		1900	埼玉県競進社
養蚕（本・別科不明）	広東	盧藉東[20]		1898. 二		1902	
	湖北	高樹藩	自	1903			宏文学院普通科
	浙江	張元成		1904. 三	1908. 九		大阪高等予科卒業
製糸本科	広東	黄華富		1899. 十二	1908. 八		大同学校卒業
		胡甯媛	官	1905. 八	1907. 八	1909	実踐女学校予科未卒
	四川	劉安欽	官	1905. 九	1907. 八	1910	養蚕改良順気社（或いは東亜蚕業学堂）
		杜朝選[21]	官	1908. 一	1909. 八		四川遊学予備学校
	湖北	鮑化龍	官	1906. 一	1908. 八	1911	宏文普通科卒業済み
		李哲子[22]	官女生		1907. 九	1912	

製糸本科	雲南	李嘉瑗 (23)	官	1901. 四	1903. 九	1910	高等警務学堂警察科卒業
	湖南	劉其超		1902. 六	1908. 八	1911	実踐女学校卒業
	貴州	況天爵 (24)	官	1905. 二	1908. 九	1911	宏文学校普通科卒業、正則学校英語科修業
	河南	張青選	官	1905. 九	1906. 九	1909	
	浙江	朱顕邦 (25)	官	1905. 十二	1907. 八	1910	成城学校普通科未卒
	安徽	黄於漢		1907. 三	1909. 三		
	江蘇	潘英				1907	
	不明	朱文園				1910	
不明	広東	陳子鋹	自	1902			
		林卓男	自	1902			
	浙江	宋希曾	自	1902. 四			
		張景行	自	1906. 七			
	湖南	劉隷蔚	自	1902. 四			
	湖北	王端粹	自	1904. 二			
	四川	羅萬鍵	自	1907. 一			
	不明	胡蘊荘					

備考 1. この表は上記資料１～９に基づき、筆者が作成した。
2. 学科別に原籍地の人数順に並べ、同じ原籍地については、来日年月の早い順に並べた。
3. 来日、入学年月はすべて新暦に換算した。但し、中国の「月」は旧暦のままとし、漢数字で表記した。稀に原文で「年」を旧暦で、「月」を新暦で表記している場合があり、その場合は、「月」を算用数字で表記した。
4. 空白は未詳。
5. 以上の４点については、以下のすべての表も同じ。

留学生が来日して入学するまで、最短９ヶ月の学生もいれば、最長８年８ヶ月の学生もいる。これは東京蚕業講習所の次のような留学生及び学生規程と関連していると考えられる。まず、留学生規程は次のようなものであった。

留学生規程

一、身体健壮且つ日本語の理解できるもの

二、志望の学科を願書に明記し履歴書に添付し、駐日本公使を経由して講習所に提出する

三、規定の学科を習得したものに証明書を交付する

四、留学生は以上の三条のほか、一般の学生と同じ規定に準ずる

次に一般学生の規程によれば､学生は養蚕と製糸に関する学理及び技術を習得することとされ、講習科目（学科、筆者注）は養蚕講習科と製糸講習科に分かれ、さらに各科は本科と別科に分かれ、留学生はほぼ本科に所属していた。また、学費は自己負担 (26) であり、所内に寄宿することが一般的であったが､講習所の都合や学生の願いで通学することも認められていた。各科の定員、

講習期限、講習資格の概要を明示すると次の表5のようになる[27]。

表5

講習科目		性別	定員(名)	講習期限	講習資格
養蚕	本科	男性	60	3年	1. 満17才以上の者 2. 中学卒業者もしくはそれに同等以上の学力を持つ者
製糸	本科	男性	60	3年	同上
		女性	20	2年	1. 満18才以上の者 2. 二年以上製糸に従事した者 3. 高等小学校卒業者もしくはこれと同等以上の学力を持つ者
	別科	女性	40	10ヶ月	1. 満20才以上の者 2. 三年以上製糸に従事し優等工女である者 3. 尋常小学卒業生もしくはこれと同等以上の学力を持つ者

規程からわかるように、留学生が入学するためには、日本語能力と中学校、高等小学校或いは尋常小学校の卒業もしくは同等以上の学力を求めている。そのため、留学生は、同講習所に入る前、清国留学生のために設置された予備校で基礎知識を学んでいたことが窺える。例えば、林溥瑩は1年10ヶ月をかけて経緯学堂を卒業した。劉宗鎬は2年10ヶ月、成城学校で学んだ。最初は蚕糸業と無関係な分野を専門としていた者が東京蚕業講習所で蚕糸業を学んだケースもある。例えば、工手学校電工科卒業と記載された鄧応祥や、高等警務学堂警察科卒業と記載された李嘉瑗はその代表例である。

予備校での学習期間は様々であるが、一旦同講習所に入学すれば、規定通り、ほぼ二三年で卒業したことがわかる。例えば、製糸本科の女子留学生胡甯媛は2年で卒業したが、同科の男子留学生劉安欽は3年で卒業した。但し、7年間も学んだ製糸本科の李嘉瑗のように、学習期間が規程を上回る学生もいた。

官立蚕業学校には京都蚕業講習所もある。これは1899年6月に農商務省が創立したもう一つの官立蚕業学校である。同校では、1902年に養蚕講習科が増設され、修業年限は本科2年、別科6ヶ月と定められていたが、1905年に本科は3年に改められた[28]。表6は同講習所の各学生の原籍地・留学時期等を学科別に整理したものである。

表６　京都蚕業講習所学生名簿

教育課程	原籍地	姓名	費用別	来日時間	入学時間	卒業時間	備考
本科	浙江	姚永元				1906	1907 年韓国で教員となる
		黄公邁 (29)	官	1904. 二	1906. 八	1910	大阪予備学校普通科卒業
	山東	劉慶麟					病気で中退
	江蘇	彭世芳					
	雲南	呉錫忠 (30)		1904. 七	1907. 九	1910	同文書院卒業
別科	浙江	林在南 (31)				1907	
	山東	殷広基					
養蚕	浙江	樊達瑩		1906. 八	1907. 九	1910	
不明	江蘇	朱祖悦 (32)	自	1901. 十		1906	1907 年本所で製糸研究を行う
		廖世勳	自	1903. 二			
		呉達	自	1903. 八	1906. 二	1909	
	浙江	盛開運	自	1904. 八			
	広東	程（水＋禾）鈺	自	1902			

(2) 私立学校

留学生が入学した私立学校は、東亜蚕業学校、高山社、信濃蚕業学校であった (33)。この三校の留学生名簿は表７、表８、表９の通りであるが、三校とも私立の速成学校のため、入学までの学歴は不問とされた。そのため、来日してすぐ入学した留学生も少なくない。彼らのうち、帰国後「遊学畢業生考試」に合格した者はあまりいなかったが、活躍した者もいた。たとえば、杜用選は東亜蚕業学校在学中から自力で『農桑学雑誌』を創刊し、蚕糸業の知識の普及に努めた。彼はまた、同郷の劉安欽とともに『中国蚕糸業会報』を主宰し、日本に倣い、中国における中央蚕糸会や蚕糸業伝習所の設立などの建議書を発表し、中国蚕糸業の近代化を目指して努力した (34)。

表７　東亜蚕業学校（日清蚕業学校）学生名簿

学科	原籍地	姓名	費用別	来日時期	入学時期
本科	四川	杜用選	官	1905. 五	1906. 十
		朱俊	自	1904. 三	1905. 九
		楊錫灝	自	1905. 四	1905. 四
		舒祖謨	自	1907. 二	1907. 四
		宋良材	自	1906. 四	1906. 四
		龔潛	自	1906. 四	1906. 六
		袁復	自	1906. 六	1906. 八
		袁齊年	自	1906. 十一	1906. 十二

本科		邱鵠	自	1906. 十二	1907. 一
		黄文駿	自	1907. 一	1907. 一
		孟宗輝	自	1907. 六	1907. 八
		敬心釗	自	1907. 十一	1908. 四
		舒興德			
		楊傑			
		秦顕			
	湖南	蔡錫周			
		阮慤士			
		龍汝翼			
	広西	鄧林	自	1906. 十一	1907. 一
		白志和			
		梁衍			
		蒙銑			
		蒙兆韓			
	江蘇	孫振烈	自	1906. 二	1906. 九
		蔡景浜			
	湖北	趙廷瑩			
		張英材			
	広東	俟度			
		潘蔭生			
	江西	蔣体仁	自	1906. 三	1907. 五
全科	四川	王巨源	自	1907. 一	1907. 八
養蚕製糸科	広西	陸汝傑	自	1907. 四	1906. 五 (ママ)
養蚕科	四川	陳顕忠	自	1908. 十一	1908. 十一
不明	四川	劉萬選		1906	
		劉安欽		1906	
		龐澤津	自	1906. 十	1906. 十二
		呉永樹	自	1907. 一	1907. 一
		丁同良	自	1907. 六	1907. 六
		盛際昌			
		王明孝			
		蒙智淵			
	湖南	郭応龍	自	1907. 三	1907. 五
		黄瑞清	自	1907. 三	1907. 五
		羅遠	自	1907. 四	1907. 五
		彭秩苞	自	1907. 四	1907. 五
		曹光祖	自	1907. 八	1907. 九
	湖北	汪鐘藻	自	1904. 五	1907. 九
	浙江	周維翰	自	1906. 五	1907. 四

不明	陝西	張栄菘	自	1907. 三	1907. 八
	広西	譚志岳	自	1907. 三	1907. 九
	不明	侯放			
		白沛霖			
		彭洪毅			
		陳思祥			
		鄭璜			
		鐘子建			
		賀守淦			
		劉本			

備考　上記資料以外に、藤岡市史編さん委員会編『藤岡市史資料編近代・現代』（藤岡市、1989 年）をも参照して作成した。

表 8　高山社学生名簿

原籍地	姓名	費用別	来日時間	入学時間	卒業年度
湖北	周錫疇	自	1908. 二	1908. 二	1912
	周錫勳	自	1908. 三	1908. 三 (35)	1912
	周宗周	自	1908. 三	1908. 三	1912
	周緯	自	1908. 三	1908. 七	1912
	張炳炎	自	1908. 四	1908. 七	1912
	王用予	自	1908. 五	1908. 七	1912
	張旭東	自	1908. 六	1908. 七	1912
	華文藻	自	1908. 六	1908. 七	1912
	張桂馥	自	1908. 七	1908. 七	1912
	余致知	自	1908. 七	1908. 七	1912
	華一匡	自	1908. 六	1908. 七	1912
	解鴻磐	自	1908. 七	1908. 七	1912
	王復旦	自	1908. 八（ママ）	1908. 七	1912
	周作霖	自	1908. 十一	1908. 十一	1912
	周于德	自	1908. 十一	1908. 十一	1912
雲南	曹元熙	自	1908. 八	1908. 九	1912
湖北	胡文鶩				1912
	張炳麐				1912
四川	唐潔				

備考　すべて養蚕別科に入学。

表９　信濃蚕業学校学生名簿

原籍地	姓名	費用別	来日時期	入学時期
四川	陳毅	公	1906. 十一	1907. 二
	洪文藻	自	1904. 四	1907. 六
	馮瓊光	自	1905. 二	1906. 二
	龔明德	自	1905. 四	1906. 八
	張平	自	1905. 六	1907. 七
	任大柄	自	1905. 七	1906. 八
	柳伯郁	自	1905. 十一	1906. 八
	陳蔚文	自	1906. 四	1907. 六
	彭家鑄	自	1906. 五	1907. 七
	蕭楚材	自	1906. 五	1907. 七
	曾忠英	自	1906. 六	1907. 八
	方楚	自	1906. 七	1906. 七
	廖文渤	自	1906. 八	1906. 十二
	陳文炳	自	1906. 十	1906. 十二
	欧陽広文	自	1906. 十	1907. 七
	許允	自	1906. 十	1907. 八
	彭祖賢	自	1906. 十一	1907. 七
	宋麓森	自	1906. 十二	1906. 十二
	葉春瑞	自	1906. 十二	1907. 七
	呉雯魯 （旧名：呉其俊）	自	1906. 十二	1907. 七
	範少淹	自	1907. 一	1908. 一
	石蘊光	自	1907. 二	1907. 八
	李尚忠	自	1907. 二	1907. 七
	王貞孚	自	1907. 二	1907. 三
	成樟	自	1907. 三	1907. 九
	陳佶	自	1907. 七	1907. 八
	鄧杰	自	1908. 二	1908. 三
	彭石昕			1907. 十二
	蘇用舒			1907. 十二
	羅萬■			1908. 二
湖北	斐宗慶			1907. 九
	鄭璜			1907. 九
	李光鑄			1907. 十
	李懊南			1907. 十
	楊凌霄			1907. 十
	秦鏗 （旧名：秦一新）			1907. 十

	簡居敬			
	蔡俠			
	襲明德			
	謝冠群			
	方以舟			

備考 ■は一字未詳を指す。以下同じ。

表 10 東亜蚕業伝習所学生名簿

原籍地	姓名	字	入学年月	卒業時期
四川	楊兆湘	敬畬	1907.8	1909
	趙祥鸞	仲鶴	1907.8	1909
	羅秀南	嚮明	1907.8	1909
	范融熙	祖欧	1907.8	1909
	易国棟	子良	1907.8	1909
	茫朝璋	仲愷	1907.8	1909
	王大棪	吟秋	1907.8	1909
	呉毅	庶吉	1907.8	1909
	談会嘉	孔彰	1907.8	1909
	何德仁	宅之	1907.8	1909
	葉錫光	穠蓀	1907.8	1909
	胡坤崧	維高	1907.8	1909
	蒙智淨	国楨	1907.8	1909
	羅振雲	錦張	1907.8	1909
	劉先■	緻文	1907.8	1909
	雷振東	卓然	1907.8	1909
	喻錫候	級三	1907.8	1909
	呉華璋	蔭浦	1907.8	1909
広西	蘇樹珣	翊中	1907.8	1909
	江中柱	錫五	1907.8	1909
	石応惠	祝新	1907.8	1909
	石善蔭	漢豪	1907.8	1909
	黄劍江	肆旗	1907.8	1909
	楊兆榮	夢憁	1907.8	1909
	韋德基	捷三	1907.8	1909
	覃華昌	桂秋	1907.8	1909
	陳仲山	宣廷	1907.8	1909
陝西	陳椿均	可莊	1907.8	1909
	張栄崧	松操	1907.8	1909
	王覲宸	楓階	1907.8	1909
	王啓夏	禹謨	1907.8	1909

湖北	成金吾	貢三	1907.8	1909
	度超珍	弼廷	1907.8	1909
	周景周	述泉	1907.8	1909
浙江	林鵬	得翔	1907.8	1909
貴州	陳錦濤	自新	1907.8	1909
広東	唐資問	新百	1907.8	1909
山西	王士選	銭青	1907.8	1909

備考　同注 10

むすびに

小論は、清末期に日本の蚕糸業学校に留学した中国人学生の名簿を整理し、それを元にその人数、原籍地、留学校、留学時期の推移、留学費用の出所などの実態を紹介した。

今後はさらに彼らが留学中の活動及び帰国後の貢献を探究していきたい。

注

（1）　詳細は佐藤武敏「清国蚕糸業視察報告書について」（『流通科学大学論集』人文･自然編 1（1)、1989 年）を参照されたい。

（2）　例えば、沈秉成著、中島亮平訳『蚕桑輯要和解一～三』（開拓使、1877 年）がある。

（3）「是我糸業、自光緒丙午年（即明治 39 年）即为区区日本所圧倒、而輸出額亦陥于衰運。」杜用選「中国蚕糸業有蹂躪世界社会之実力論」『中国蚕糸業会報』第 1 期、中国蚕糸業会、1909 年、12 頁。

（4）「長野蚕業学校」と表記している史料もあるが、『中国蚕糸業会報』を参照すると、信濃蚕業学校のことだと判断できる。

（5）　実際、100 名以上留学していたという。「川人留学日本蚕業者達百人以上。」『中国蚕糸業会報』第 2 期、1909 年、17 頁。

（6）　即ち曹元熙。『清末各省官自費留日学生姓名表』208 頁では、雲南出身、『明治 45 年度私立甲種高山社蚕業学校並分教場附本科及別科生徒姓名』36 頁では、湖北出身となっている。ここでは前者を取る。

（7）『明治 40 年度私立甲種高山社蚕業学校並分教場附本科及別科生徒姓名』111 頁は四川省出身の唐潔を在学生に算入している。但し、『明治 45 年度私立甲種高山社蚕業学校並分教場附本科及別科生徒姓名』の卒業生名簿中には見られない。ここでは学生数に算入する。

（8）　四川省出身の留学生劉安欽は 1906 年東亜蚕業学校に入学し、1907 年東京蚕業講習所に入学した（津久井弘光「清末留日学生と信濃蚕桑学校」346 頁)。本表では重複を省くため、後者に算入する。彼については小論全体を通じて同じ扱い方をする。

（9）　王国席「清末農学留学生人数与省籍考略」（『歴史档案』、2002 年 6 月）によれば、清末農学留日学生のうち、彼が氏名を確認できた者は 272 名であり、実際はそれ以上の学生が留学していたということである。また、アメリカ留学したのは 28 名、ヨーロッパ留学したのは 13 名となっている。但し、彼は同論文中の「1908―1912 年留日農学生卒業学校、人数、籍貫統計表」で、東亜蚕業学校 30 名、東京蚕業講習所 17 名、信濃蚕業学校 27 名、高山社 16 名としているが、その数は筆者の統計より遥かに少ない。

(10) 王煥琛編著『留学教育――中国留学教育史料』第2冊、台北国立編訳館、1980年、第793頁、第804頁、第817頁、第846頁。

(11) 東亜蚕業伝習所卒業生38名の来日年は未詳である。入学年は「東亜蚕業伝習所学生招募」(『朝日新聞』東京、1907年8月12日の広告欄）の「来十月二十五日當学堂新班開始」という文面から推定した。また、卒業年は、『中国蚕糸業会報』第1期（1909年8月発行）に同校卒業生として氏名が掲載されていることから推定した。

(12) 呂順長『清末浙江与日本』（上海古籍出版社、2001年)、第9-19頁。但し、汪有齢は嵇侃とともに留日したが、蚕糸業から他の分野に変ったため、小論の統計には算入していない。また、嵇侃については『日本留学中華民国人名調』（第351頁)、『東京高等蚕糸学校卒業者一覧』（1932年、第32頁）にも記載が見られるが、前者では原籍地を「江蘇籍」としているが、それは間違いである。

(13) 李喜所『近代留学生与中外文化』天津教育出版社、2006年、第143頁。

(14) 詳細は胡穎『清末の中国人日本留学生に関する研究―主に留学経費の視点から』（神奈川大学、2016博士論文）を参照されたい。

(15) 東亜蚕業伝習所の学生は、経費の出所が不明なので、ここでは考察の対象から除外する。

(16) 東京蚕業講習所はその後、東京高等蚕糸学校（1914年)、東京繊維専門学校（1944年)、東京農工大学繊維学部（1949年）などの変遷を経て、1962年に繊維学部から工学部に改称された。

(17) 『清末各省官自費留日学生姓名表』139頁は、鄧応祥の来日年月を光緒二十六年十一月、入学年月を光緒三十三年十月と記載している。

(18) 『清末各省官自費留日学生姓名表』336頁は、劉宗鎬の来日年月を光緒三十三年七月、入学年月を宣統元年七月と記載している。

(19) 『清国留学生会館第三次報告』84頁は、鄭華星の来日年月を光緒二十五年、卒業年月を光緒二十九年五月と記載している。

(20) 『清国留学生会館第三次報告』84頁は、盧藉東の来日年月を光緒二十五年、卒業年月を光緒二十九年五月記載している。『日本留学中華民国人名調』348頁は、彼の名を「盧籍東」と記載している。

(21) 『清末各省官自費留日学生姓名表』261頁には、曾朝選という人物が記載されているが、原籍地、来日年月と入学年月が杜朝選と一致するため、同一人物と推測できる。

(22) 『東京高等蚕糸学校卒業者一覧』62頁は、卒業年度を明治42年と記載している。

(23) 『清末各省官自費留日学生姓名表』233頁は、李嘉瑗の来日年月を光緒三十年四月、入学年月を光緒三十三年八月と記載している。

(24) 『清末各省官自費留日学生姓名表』233頁は、況天爵の来日年月を光緒三十一年五月、入学年月を光緒三十四年九月と記載している。また、『東京高等蚕糸学校卒業者一覧』70頁は彼の名を「況夫爵」と記載している。

(25) 『清末各省官自費留日学生姓名表』334頁は、朱顕邦の来日年月を光緒三十二年二月、入学年月を光緒三十三年九月と記載している。

(26) 但し、中国人留学生は官費学生が多く、その学費は清国政府より支給されていた。

(27) 『明治43年度東京蚕業講習所一覧』東京蚕業講習所、1910年、第1-12頁。

(28) 該校は京都高等蚕業学校（1914年)、京都高等蚕糸学校（1931年)、京都繊維専門学校（1944年）などを経て、1949年から京都工芸繊維大学の一部になった（京都工芸繊維大学開学100周年・大学創立50周年事業マスタープラン委員会記念誌刊行専門部会編『京都工芸繊維大学百年史』京都工芸繊維大学、2001年)。

(29) 『清末各省官自費留日学生姓名表』169頁は、黄公邁の来日年月を光緒三十一年三月、入学年月を光緒三十三年八月と記載している。

(30) 『清末各省官自費留日学生姓名表』169 頁は、吳錫忠の来日年月を光緒三十年十月、入学年月を光緒三十三年八月と記載している。

(31) 『衣笠同窓会名簿』(『日中蚕史研究の関係資料集』247 頁) は、彼の名を「林左南」と表記している。

(32) 『清国留学生会館第三次報告』(1903 年 11 月) では原籍地を「広東」とし、来日年を「1902 年」としている。

(33) 東亜蚕業伝習所は私立学校と思われるが、詳細が不明なので、本論では考察の対象から除外する。但し、学生名簿は入手できたので、参考のため、表 10 として掲載する。

(34) 「上農商工部請設中央蚕糸会条議」(『中国蚕糸業会報』第 1 期、1909 年) 及び「共済社蚕糸業伝習所招集学生広告」(『中国蚕糸業会報』第 2 期、1909 年)。

(35) 原文は印刷が薄くて見えにくいが、「三月」の可能性が高い (『清末各省官自費留日学生姓名表』207 頁)。